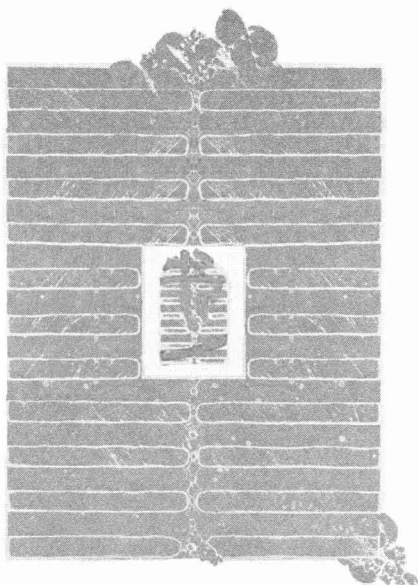


三枝和子
詩人と娼婦と赤ん坊



詩人と娼婦と赤ん坊

三枝和子



新潮社

詩人^{しじん}と娼婦^{しょうふ}と赤ん坊^{あかぼ}

昭和五十一年十一月二十日 印刷
昭和五十一年十一月二十五日 発行
定価 九八〇円

著者 三枝^{さえ}和子^{わこ}
発行者 佐藤^{さとう}亮一^{りやういち}
発行所 新潮社

東京都新宿区矢来町七十一

郵便番号 一六二

電話東京 〇〇三二六六一五一一 業務部
〇〇三二六六一五四一一 編集部
振替東京 四一八〇八番

印刷 二光印刷株式会社
製本 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

三枝和子・戯曲集・目次

花束に爆弾を 5

喪服を着た九官鳥 61

六つ目の首、それはお前だ！ 87

詩人と娼婦と赤ん坊 131

あとがき 198

装画
荒木
哲夫

戯曲集

詩人と娼婦と赤ん坊

花束に爆弾を

1

幕が開く。

時も所も定かでない。ただ明るい。影がなく、そろそろいまでに光り輝く空間。舞台には花束が散乱している。

長い間。

突然、閃光と大きな爆発音。瞬間、舞台暗くなる。

暗闇のなかで爆発音が続く。

やがて溶明。

煙のおおう舞台には、花束はない。

かわって同じ場所に仮面が散乱している。ふいに仮面の一つが、奇妙な鋭い声をたてて笑い始める。他の仮面は何の反応も示さない。仮面の笑い、ふと止む。

ゆるやかに溶暗。それにつれて、今まで笑わなかった仮面の群れから、不気味な不自然な笑い声が湧いて来る。突然Aが照らし出される。

A (仮面をつけたまま、おもしろく語り始める) 思い起せば、

これは、もはや歴史のなかに繰り入れらるべき事柄ではありませんが、私が今日の地位を獲得するに到る道筋は、遠く、昭和十二年にまで遡ることができます。昭和十二年……。

声 (暗闇のなかから) 日支事変の勃発だ!

A 当時の社会的状況というものは、今日では想像するだけに困難な圧制、統制というものが敷かれ、官憲は自らの権能をほしいままにして、自由なる思想を壊滅することに全力をあげ……。

声 それは自分のことだろ!

A 私は、それとたたかい、この圧制を切り抜けることによって……。

声 (Aの口調を真似て) いかに巧妙に次の時代の最高権威者の立場を獲得するか、いや、獲得するために生き残ることができぬかに腐心し……。

A さらに、この弾圧をくぐり抜けつつ、いかに真に人間的なもの、真に革命的なるものをひそかに存続せしめるかに、いささかの努力を払って来たものであります。しかるに、この、思想を領導する立場にある知識人というものの存在ほど困難なものは、いつの時代にもないといつてよく、知識人としては、その責任と、すなわち……。

女の声 (突然に) カクメイというのは、婦女に暴行するんざましようか。

女たちの声はめいめい勝手にAの講演のなかに飛びこんで

来る。

女の声 え？ 何ですって。

女の声 婦女暴行ざますよ。

女の声 え？ あのかたが？ まあ、エッチ。

女の声 もう済んだことでございますの。

女の声 何がでございますか。

女の声 どなたか、いま、セキニン——と言いましたわ。

A (いちだんと声を張りあげる) 昭和十六年、私にとつて、

決定的な転機が訪れました。そうです……。

声 太平洋戦争勃発の年だ。

A 爾来、……爾来……私の立場は一貫して……立場は一

貫して人間愛の問題を追求することに集中し……。

暗闇のなかから、いっせいに笑い声が起る。先刻の仮面たちの非人間的な、不自然な乾いた笑い声に比して、きわめて人間的感情的な笑い声である。たとえば、おべっか笑いの馬鹿笑い、哄笑、含み笑い、自嘲、泣き笑い、氣ちがい笑いの、高笑い……笑い声はリアルであるよりは、むしろカリカチュアライズされてある方が望ましい。

いきなり明るくなる。物体が総て曝き出しに、そのため、いくぶん歪つた印象さえ与えられる。

パーティーの出席者たちは、先刻仮面の散乱していた同じ場所

舞台中央にテーブル。
テーブルの上にも花。

出席者はそれぞれカッブルになっている。今は笑っていない。出席者の男たちは全く同じポーズで煙草を吸い、そして煙を出す。時折、ドアの方をいっせいに見る。誰かを待っている様子。

C 夫人 (Cへ) あなた、今朝はいかがでしたの。

実行委員C ああ、立派なのが沢山出たよ。

C 夫人 じゃ、調子は上々ね。

実行委員C ああ、上々だ。ちよつと向こうを見て来る。

(退場)

D 夫人 もつと愉しそうな顔したら。

実行委員D うるさい。黙ってろ。

D 夫人 じゃ、もつと悲しそうな、思いつめた顔をするの。

青年のように。あなたには似合うかも知れないけど……

薄気味ワルイワネ、ソナ顔……。

実行委員D たとえば、今朝、何があったっけ？

D 夫人 たとえば、今朝は笑ったわ。

実行委員D たとえば金魚の水は毎日、古い水を三分の一

捨てて、新しい水を三分の一入れる。やったか？

D 夫人 うちに金魚はいないわ。

出席者E おい……。

E 夫人 わかったわ。

出席者 E まだ何も喋ってないぞ。何がわかったんだい。

E 夫人 わかったと言ってるのに。

出席者 E 早呑みこみするな。田舎者！

E 夫人 今日は適当に立ち廻って言いたいんでしよう。

出席者 E 違うよ。……今朝の卵のことだ。

E 夫人 毎朝、半熟卵一個とトースト一片。トーストはマ
マレードでミルクは一杯。りんごは一個ね。それより多
く摂取しても、少なくともいけないの。そうすれば長生
きできます。八十歳でも九十歳でも生きられます。自分
が、もう嫌になっても、まだ死ぬことができません。わ
かった？

出席者 E わかってたまるか。卵焼きがいいんだ。

E 夫人 二分四十五秒以上の卵を食べると長生きできませ
ん。あなたには絶対半熟卵を食べさすわ。それが生活よ。

F 夫人 (何故か笑っている)

出席者 F 何がおかしいんだ。

F 夫人 いいえ。何もおかしくないわ。

出席者 F ばかばかしい。

F 夫人 でも！ どんな顔してればいいの。

出席者 F 普通でいいよ。

F 夫人 だって！

出席者 F いいんだってば、普通で！

出席者 G (何とか女史といったスタイル。眼鏡でもかけている)

………

出席者 H (Gに寄って来る) あなたが何も喋らないでい
ると、何だか不自然ですね。

出席者 G あら、私、そんなにお喋りじゃないわ。年甲斐
もない理想主義者が、突然、不器用に見えるときがある
ってわけね。でも私、理想主義者じゃないわ。

出席者 H こりゃ又、とたんにからむんだから。その方が
あんたらしいがね。

出席者 G オールドミス扱いするの。

出席者 H え？ でもオールドミスには違いない。

出席者 G いやねえ。……結婚しない？

出席者 H いいですよ。

出席者 G 冗談よ。

出席者 H そう冗談ですよ。

出席者 J 俺は腹が減ったよ。

出席者 I 喰って来なかったのか。

出席者 J うん。

出席者 I こういうときは、あらかじめ何か腹に入れて来
る。常識だよ。

出席者 J そういふもんか。

出席者Ⅰ　　そういうもんさ。ときに今日は何をやるんだ。

出席者Ⅱ　　手品をね。

出席者Ⅲ　　そんなとき、一番生き生きしてるね、君は。

出席者Ⅳ　　有難う。アリガトウ。

出席者Ⅴ　　……………

出席者Ⅵ　　何？

出席者Ⅶ　　何も言わないよ。

Ⅰ、Ⅱ、手品の準備をする。口笛を吹くか、あるいは唄を鼻唄まじりに口ずさむ。

A登場。続いて夫人、令嬢、B、B夫人と続く。Cが先導して来る。一同拍手で迎える。

AとB、きわめて尊大な物腰で振舞う。

Aとは、いわば最高権威者、オーソリテイ、あるいはオーソライズされたものであり、Bはその後継者。

最高権威者というものを、どのように形象化して演出しようとするかは自由である。最高権威者の性格の決定の仕方が、その劇の具体性を決定する。むしろ最高権威者は、全く具体性を伴わない抽象的なもの、ないしは象徴的なものとして演じられてもよく、その場合は、そのことが、その劇の性格を決定する。

最高権威者ともっとも緊密な関係にあり、ほとんど最高権威者と等しいものであり、その異質点は、権威が消失する

ものではなく、必ず受け継がれていくものだということが表現する存在として後継者Bが居る。

パーティ実行委員C、Dは、むしろ権威者たちのグループである。しかしまだ最高権威者にならないので、その分だけ、いくぶん反権威的である。以下、出席者E、F、Gのグループ、H、Ⅰ、Ⅱのグループとも同様である。

権威者たちのグループと対抗して後に登場する青年たちのグループがあるが、これは、権威者たちのグループの性格にどのような具体性を与えるかによって規制されるが、もしもこれが抽象的、象徴的に演出されるならば、青年たちは権威者たちの過去の一つの姿であり、権威者たちは青年たちの未来の一つの姿である。

実行委員Cが、いかにも敏腕家といったきびきびした物腰で、全体を取りしきっている。拍手の続くなかで、一人一人がAに花束を贈呈する。A、B、その度に声を合わせてゆったりと笑う。

実行委員C　多年にわたる先生の……さよう、戦前、戦中、

しかも戦後におきましては二十七年に及ぶ長いあいだの先生の御苦労に、ささやかながら私達は花束を贈呈したいと思ひます。(拍手)本日ももちまして、先生は第一線から退かれますが、雑事から離れられ、ますますその思想が深く展開されることを、先生の御健康を祈りながら期待したいと思います。(拍手)今までに倍し、私達を御

鞭撻下さいますようお願いしましょう。(A、ゆったりうなづく) さ、花束を贈呈しましょう。さあ、並んで下さい。一列に。押さないで、一列に、そう、そう。(別に押している人はいない。一列に並んでもいいない) 花束を贈呈した方は先生と栄誉ある握手をして下さい。

C 夫人 やりすぎよ。

実行委員 C 儀式はちゃんとやらなきゃ。これはセレモニーです。生活です。

実行委員 D 生活か。じゃ、傷つける者と傷つけられる者の存在が必要だ。

実行委員 C そんなことまでは、ぼくの筋書きにはないよ。それは誰だっていいんだ。とにかく、あんたはこのパーティの実行委員なんだから、もっと積極的にやって下さい。

実行委員 D 「みなさん、これは儀式です。生活です。花束を贈呈しましょう」なんて言えないよ。

D 夫人 似合わないわよ。あなたには。

以上の会話は、笑いや、無意味な言葉のとび交うなかでなされる。紋切り型のあいさつ。外交辞令的なもの。Bは「わかってます。わかってます。あとはお任せ下さい」を連発している。A夫人は、いくぶん権高な調子で「今日は有難うございました。みなさまのおかげさまでございます

わ」などと言っている。A令嬢だけが自分の存在を皆と異質の世界に知っている。

実行委員 C 遅いなあ、連中。

実行委員 D 誰を待っているんです？

実行委員 C ……………

実行委員 D 何を企らんでいるんです？

実行委員 C 企らみ？……馬鹿言っちゃいかん。若い連中だよ。

実行委員 D えっ？ 呼んだんですか。

実行委員 C 呼んだわけじゃない。来るというから打合せしただけだ。

実行委員 D 連中をこんなところへ引きこんじゃいかんなあ。

実行委員 C ほほう。あなたにも似合わしくない、反動的な御意見ですな。

実行委員 D いや、このようなパーティは、われわれ、何らかの形で権威に追隨しているものだけで開くべきものでしょう。若い連中は権威に反逆することを旗印にしている。そのグループを招くことによって、厳然と出来ている区別を、ここであいまいにするのは、かえって悪いことですよ。

一同Cを注視している。

実行委員C　しかしね。これは、実は先生の御希望なんだ。実行委員のあなたが、そのようなことを仰言つては、まことに困るのだが。(一同の注視に気づいて)花束の贈呈が一応終了したところで乾杯といきたいのでありますが、まだ一つ花束が見えませんか。もうすぐ、必ず来ますので、それまで乾杯は待ちたいと思います。まだ見えぬ来客とは、先生の御人徳のたまもの、先生のお教えを慕う若い連中です。そうです。花束を持って、もうすぐやって来ます。

D夫人 (頓狂な声で) 若い連中が花束を持って来るのですって? まあ、美談でございますわねえ。

B夫人 若い人たちがねえ。そうですか。素敵じゃあございませんの。ねえ。

実行委員C　そう。素晴らしいことです、奥さん。全く素晴らしいこと。(ひとりごとで) こりやどうしても花束が出なきやならん。

A、持ちきれないほどの花束を抱えて微笑している。令嬢、いきなり立ちあがる。

A夫人 どうしたの、急に。

A令嬢 いいえ、何でもないので。

一同令嬢を注視している。
間。

A令嬢 (注視に気づいて) 来ない方がいいのに――。

実行委員C　何を仰言るんです、お嬢さん。すっかり打合せが済んでいるんです。さあ、皆さん、手近なものを召し上りながら、いましばらくお待ち下さい。

グラスが皆に配られる。

実行委員C (ひとりごと) こりやどうしても花束が出なきやならん。あいつら持って来るんだらうな。うん、もし奴らの筋書に花束がなかったら、(花瓶を確め) これでいい。何だっさいいんだ。要するにムードなんだから。

以下人々の会話は、始終ダブって、あちこちの談笑の渦のなかから自然に湧き起って聞こえて来る。

D夫人　でも、あの人たちが、こんなところへ花束を持っ

て来るなんて、恰好を想像するだけでも滑稽ですわ。恋人じゃあるまいし、あんな干し猿みたいな（Aになる俳優が瘦せていれば干し猿、太っていれば風船豚）じいさんに、花束なんて。（笑い出す）干し猿と花束……干し猿と……。（笑いが止まらない）

B （厭らしくにたにた唇を緩めている） そんなこと言っていないですかね、奥さん。御主人の地位にかかわることだってありますぞ。

D 夫人（相変らず素頓狂に無邪気な感じで） いいえ、先生。宅などは、あちらの先生と違ひまして、このような生活が大嫌いなんです。宅は……自由、になりたいのですわ、きつと。ここは、とても、息が詰まりそうですもの。

B は、は、は、（豁達に笑う）自由だって？ は、は、は、あんたは全く突飛な、可愛らしいことを言う。

出席者G どう、あの態度。（後継者Bを顎でしゃくる）もうすっかり板についてるじゃないの。

出席者F すでに次の権威者として、貫禄充分というところですか。

出席者E いや、誰だって、あの位置に坐ればあななのです。中身でなくて、そいつの置かれる場所ですよ。それが人間の価値を定める。

出席者F われわれも、もう暫く待てば、と言うことですか。何事にも順序というものがある。

出席者G いやだわ、私。そんなふうに考えていくのは……。

出席者F あんたは幾つになってもロマンティストだねえ。
出席者G ロマンティスト？ いいえ、私は理想主義者なのよ。私は人間の善意を信じているのですわ。人間の善意をね。

出席者E 人間の善意？ ふん。（嘲笑して）で、したがって、あなたは今夜のパーティーは成功すると言うんだね。

出席者G もちろんですわ。だから出席しているんですわ。

実行委員C、A・Bと共に青年たちを迎える予行演習を始める。

実行委員C ええ、ええ、そうですね。先生は、やはりその入口……そう、連中が真中の扉をぱっと開ける。拍手——と。それから花束……これは連中の代表が捧げることになっています。ちよつといま、私が代理でやってみます。……ええつと……ぱっと開ける。拍手——と。ああ、駄目ですねえ、先生。御訓示をなさるんじゃないけりませんか、そんなに深刻な表情をなさつちやいけ

ません。にここにこと……にここに……駄目ですな。笑顔で……笑顔で……。

B 君、無理だよ。先生に笑顔を求めるなんて。先生のこれまでの御立場からいっても、いくら隠退なさるからって……。

実行委員C 私は何も、先生が隠退なさるから愛想よくなさるよう進言しているではありませんよ。時勢が変わったんです。変りつつあるんです。時の流れに合せて変貌するのが、最高権威者として生き残る知恵というものだと御忠告申しあげているつもりですが。むしろこれは(Bにむかって)先生に申しあげているのですよ。

A (決然と) やってみましょう。(左右を見て、にここに愛想笑いをしながら練習)

実行委員C よろしゅうございますか、先生。問題はあの連中なんです。あの連中。あの連中を制するものは世界を制す、ですからね。連中に愛想よくするのだということを、はつきり、露骨に示さなければなりません。連中が花束を差し出した、その瞬間、ぱっと笑顔、以後、にここに、とそれでやって下さい。

A たしかに連中は花束を持って来るんだらうね。(冗談めかして) まさか爆弾じゃあるまいね。

実行委員C ええ、ええ、大丈夫です。そのところはち

ちゃんと打合せができて居ります。それにこれは、あの連中——と申しまして一応カクメイとは無関係でございますから。

A え、何だって? (大声をあげる) カクメイ?

一同、はっと談笑を止める。一瞬の沈黙。それからざわめき。「あの連中——って何なの」「カクメイ——って何なの」など。実行委員Cが説明しようとするが、誰もあまり身を入れて聞いていない。

実行委員C 大丈夫です。大丈夫です、皆さん。御安心下さい。あの連中はあの連中でも、一応カクメイとは無関係だと申し居るのです。大丈夫です。大丈夫です。

出席者F だから女は怖いと言っているんです。ウーマンリブ、ウーマンリブ、ぶるぶるだねえ。

出席者H ウーマンリブだって? (冗談めかして叫ぶ) そいつは堪らない。あれはカクメイのなかでも、もっともコワイんだ。

出席者G ウーマンリブじゃありませんわ。あの連中だと言っているのでしょう。

出席者E どちらにしたらって同じことですよ。この連中が何とかして取りこもうとしている勢力であることに間違いない。